

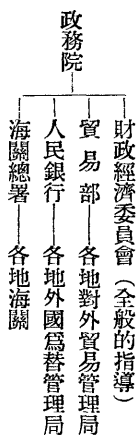
一九五〇年の中國貿易

一 新中國のすべての經濟政策は對外貿易を含めて、すべて土地改革、農民經濟の向上から出發し、生産構造の高度化、國の工業化に志向している。この角度からすれば、新中國の對外貿易の性格が従前の舊中國の對外貿易とは全然その性格を異にするに至っていることは當然であり、その變質は昨年度對外貿易の實績にも明らかに見とられる。

「新中國の貿易、海關政策は新中國の産業發達の重要手段でなければならぬ。我々は今では中國の大門の鍵を外國帝國主義から奪い取つて自己の手中に握つてゐる。今後は中國の産業は外國資本主義の廉價競争にさらされないであらう。また中國の原料はまず以つて國內の産業需要に向けられるだらう。かくして始めて百年來阻害されて來た中國の産業發達の道を開くことができる。」(劉少奇)

貿易を國の經濟基本方針に服従させるためには、それが嚴重な

國家管理下におかれねばならないことは言うまでもない。管理の機構は次の如くである。



對外貿易は國營輸出入公司及貿易部の認可を得た内外商社によつて行われる。昨年度は輸入の七〇%、輸出の五四%が國營公司の取扱ひになつてゐる。

輸入品目は國の經濟建設に對する重要な程度に應じて、また輸出品目は農民生活向上に支障がないことを目安として、夫々自由品目、許可品目、禁止品目に分けており、また夫々税率を異にしている。税率は固定的でなく機動的であり、たとえば昨年度中にも棉花輸入税を緊急免除したり、鐵釘税率を國產保護のため急に引上げたりしている。税率は相手國が中國と貿易互利條約を結んでいる場合は最低税率、然らざる場合は普通税率が適用される。

貿易バランスについては、百年來の入超、外國爲替借越の大勢を停止し、自主貿易を確立するために「出入平衡」即ち輸出によつて得た外貨の量だけの輸入ということが鐵則であり、且つ確實に實現されている。

二 一九五〇年の對外貿易の國別、品目別構成は左圖の如くである。(『人民海關』二卷二期、『新華月報』一九五一年四月號引用による。)

同圖ではただ百分比構成を示すのみでその實數は分らない。外務省調査局の『中國年月報』三七號（一九五一・四・一五）は、根據は示していないが、昨年度中國本土の輸出總額五億USD輸入四・五億USDと推計している（出超率一〇%強）。ほかに東北貿易があり、これは一九五〇年計畫として出入とも一・五億USDと示されているから、東北を加えた全中國の輸出量は六・五億USD、輸入量は六億ドル、合計一二・五億ドルとなる。（出超率一〇%弱）

中國研究所『一九五〇年中國對外貿易の動向』は、中國本土各港の貿易實績及び貿易相手國側發表を手がかりにして左の推計を試みている。

	輸出	輸入	合計
中國本土	三六五	三四三	七〇八
東北	一六〇	一六〇	三二〇
西北	二二	三〇	五二
合計	五四七	五三三	一〇八〇

出超率は約三%である。（單位百万ドル）

この兩推計ではいずれも出超率一〇%以下であり、後述の出超率推計二〇%と可成りの差があることが氣にかかるが、貿易總額一億乃至一二億アメリカドルという所はほぼ當らずといえども遠からずであらう。

註、村松祐次氏の「中國經濟の社會體制」は中國の歷年貿易額を米ドルに換算して左の如く示している。三五年以後の激減

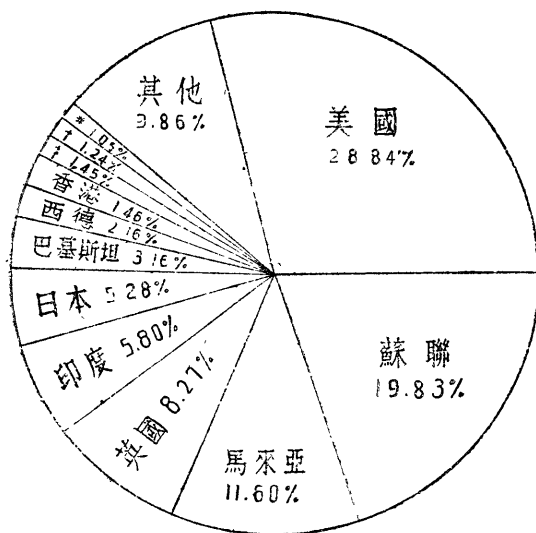
は滿洲國獨立によつて滿洲貿易が加算されていないためであらう。

	輸出	輸入	合計
一九一五年	二五九	二八一	五四〇
二〇	六七一	九四五	一六一六
二五	六五二	七九六	一四四八
三〇	四一一	六〇三	一〇一三
三五	二〇八	二四一	四四九
四〇	一一九	五一一	六三〇
四七	二二八	四七七	七〇五

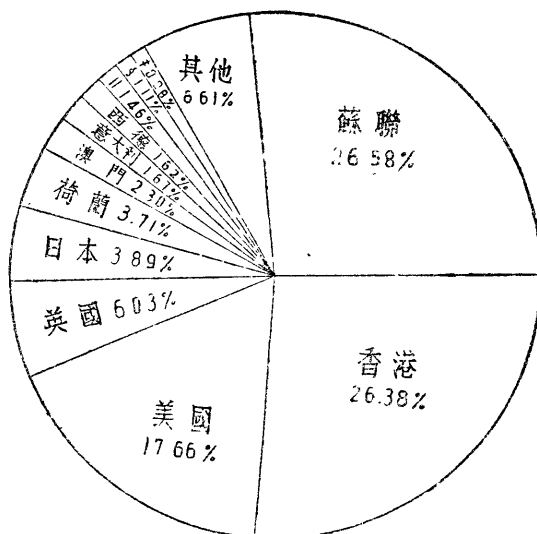
この表と比較してみれば、一九五〇年の中國貿易量はほぼ一九三〇年に匹敵するものと見られる。なお巫山雲は「新中國の對外貿易の展望」（一九五一・一・一）で「新中國の一九五〇年度輸出は一九三二年以來の最高である」と言っている。

孔原「新中國海關の第一年」（一九五一・一・三『人民日報』所載）によれば、同年一一〇月間の貿易は三二%の出超であつたと言っている。しかし一一、一二兩カ月には著しく輸入が促進されたので、全年としては出超率は之を下廻るに違いない。「一九五〇年對外貿易値比較表」（『新華月報』四月號所載）の月別指數によつて、全年の出超率を推計すれば二一%になる。前掲二個の貿易實數推計の出超率とは相當のひらきがあるが、いずれにしても一八五九年海關統計の開始以來、六年を除いては常に入超を續けて來た中國貿易の帳尻が、俄然出超に轉じた實勢は疑えないと

進口（輸入）

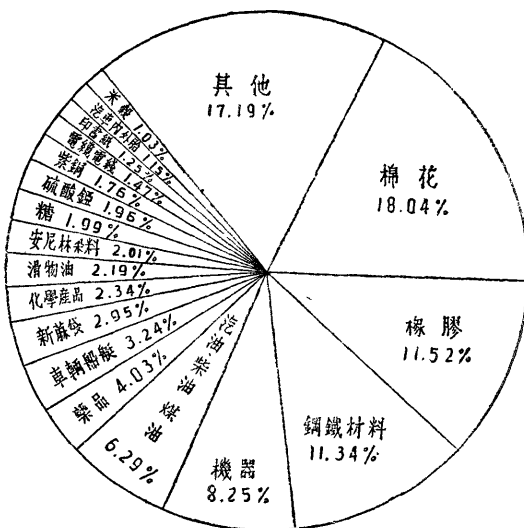


出口（輸出）

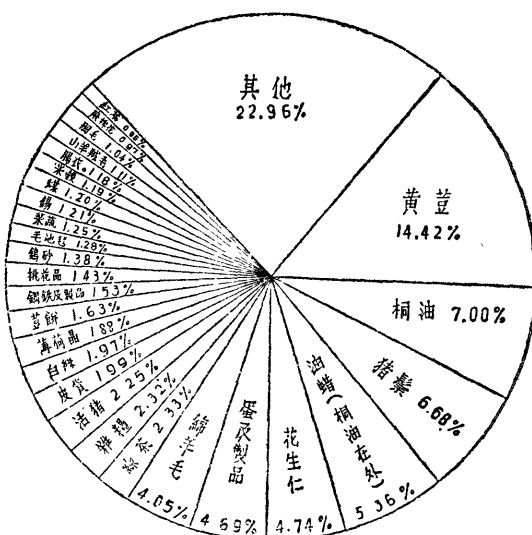


* 泰國 † 待解放區 ‡ 比利時 § 波蘭 || 摩洛哥
相手國別比率圖（1950年）

進 口 (輸入)



出 口 (輸出)



主要品目別比較圖 (1950年)

ころである。

一 貿易品目、ことに輸入品目の構成が從來と著しく異つてゐることは明瞭である。總輸入額中、主要輸入品目の占める百分比は次の如くである。

	一九三一—三五	一九五〇
飲 食 品	二一	三
セ ン イ 製 品	九	：
葉 煙 草	三	：
棉 花	一〇	一八
石 油 類	六	六
ゴ ム	：	一二
金 屬	七	一三
機 械	四	八
交 通 要 具	三	六
以 上 小 計	六三	六六

米、小麥、小麥粉から始まり綿製品、葉煙草に至る必需及び奢侈消費財が合せて三三%から三%餘に激減していることが第一。ゴム以下の主要生産財四品目が合せて一四%から三九%に激増していることが第二。そして原料棉花が一〇%から一八%に倍増していることが第三。

一九三〇年代には輸入額の二一%を占め、概ね二〇〇萬トンを上廻つていた主食輸入が、しかも一昨年夏秋の大水害（被災農田面積は全農田の一〇%）の翌年たる一九五〇年において忽ち停止

し、一九五一年にはインド向け食糧輸出にさえ轉じつつあることは、一見極めて奇異に感ぜられるが、それを可能にしたのは次の二つの事由であると言われる。

1 國內糧食流通の中軸が國營の（内國）貿易公司に掌握され有餘の地方から缺乏の地方への糧食の移動が極めて能率に行われ、且つ食糧が現物税（公糧）として徴收されてその操作を一層圓滑にしていること。従前は「地方に飢饉の様子があれば、他の地方には忽ち糧食の屯積、投機を生じ、人爲的に糧食の流通が硬塞されたのである。

2 五〇年度の糧食生産は前年に比し一一%を向上して戦前水準の八五%に恢復し、ことに一昨年の水災があつたにも拘らず華北の舊解放區では殆んど戦前水準に接近したこと。五一年には更に對前年比七%の向上が計畫されているが、今夏河南省の小麥生産は現に前年より一〇%高の實績を示したと報ぜられている。今後中國が再び主食の不足を輸入に仰ぐという如き事態は殆んど生じまい。

二 纖維製品の輸入が停止し、その分だけ原綿輸入が増加して國內綿業を保護している形がその次に注目される。だが全體として見れば、中國の綿貨需給は一九五〇年にはまだ相當に窮屈を免れなかつたらしい。一方では農民の購買力上昇に應じ得るようにより織維工業を擴張すること、他方では朝鮮戰爭のような事變によつて一時にしろ動搖を免れなかつた絲布の價格を安定させることが當面の急務となつた。本年一月四日の人民日報社説「綿絲布の統

購の重要性」は言ひ、「物價變動の中核は糧食と絲布であつたが糧食は既に安定したから、今や國民の綿絲布消費水準の向上と物價安定との二方面から、綿絲布の増産と流通規制とは緊急の任務である」と。

一九四九年の原綿産高は九〇〇萬ピクル、五〇年は五九%を増加して一四〇〇萬ピクル、一九三六年の一六〇〇萬ピクルに次ぐ豊收であつた。然し昨年の綿業は主として一昨年産の棉花に頼らなければならず、紡績業の一つには原綿手當の點からも年初には七〇%程度の操業率しか發揮できなかった。棉花輸入税の撤廢等の臨時措置を行つて、輸入額の一八%に及ぶ米綿の輸入が強行されたのはそれを反映している。輸入總額を六億ドルとすれば、その一八%は一〇八百萬ドル、かりにトン當り七八〇ドル（一九五〇年日本輸入棉花平均單價）であつたとすれば一四萬トン、二八〇萬ピクルの輸入である。國産九〇〇萬ピクルと合せて一、一八〇萬ピクルである。

一九四八年、中國の紡錘數は人口一〇〇人當り一〇四錘（一九五一年一月四日『人民日報』であつたと言ひから、人口四億六千萬人とすれば四七八萬錘の勘定である。だから一九五〇年にはほぼ五〇〇萬錘が年初には七〇%、一〇月には九二%と言ひから、恐らく年間としては八〇%見當の操業をしたことにならう。しかも本年一月一九日の政務院紡織工業部の報告によれば昨年度の綿絲生産は戦前の最高一九三〇年に等しく、綿布は戦前最高一九三六年を八%だけ超過したと言つてゐる。

（註）紡織工業部の報告が二〇時間作業で一錘當り綿絲生産量一ポンドと言つてゐるのから計算すれば、五百萬錘で操業すれば年間の綿絲生産高は二、〇〇〇萬ピクルに達する筈である。

今年度の棉花生産目標は對前年三七%増の一九〇〇萬ピクルであるが、その達成のために棉農に對する技術指導、金融援助、棉花の對食糧比價の保證、棉花による農業税の納入許可等の助成策が進められている。新中國の意圖が極めて近い將來における原棉及び綿絲布の國內自給であることは疑いない。

三 金屬及び機械の輸入激増は輸入面における第三の注目すべき現象である。輕工業に止らず重工業（金屬、機械、化學）にまでもその工業化を推し進め、完全なアウタルキー態勢を整えようとする意圖の現われである。

舊中國の産業資本（ただしその生産高は國の總生産高の一〇%にすぎない）の構成は、ウー・チュン・ミン氏「中國産業資本分析」（一九四九・八・二五『經濟導報』）によれば（百分比）

	一九三三年	一九四六年
生産財生産	八	一二
消費財生産	九二	八八
（内纖維生産）	（三七）	（三五）

と言われている。工業化、ことに重工業化の中心は東北である。戦争と内亂とは全生産を著しく破壊したが、一九四八年末完全解放以來その恢復

は相當の速度で進行している。たとえば

	一九四一年	一九四二年	一九四三年
總生産のうち工業生産の占める百分比	五六	三五	四三
工業生産高の恢復指數	一〇〇	二九	五七

しかも一九五〇年における東北工業生産のうち七九%が生産財、二一%が消費財と計畫され、東北人民政府の一九五〇年度歳出、穀物規準一、二三九萬トンの五四%が經濟投資、四〇%は工業投資、三四%は生産財工業に對する投資に向けられる計畫であると言う。(一九五〇年六月五日『人民日報』)

四 輸出品目は殆んど全部農産原料乃至半製品から成る點では三〇年代と一九五〇年と變化はない。經濟發展においておくれである國の輸出品が原始産業の生産物から成ることは避けられい常道である。前後の主要輸出品七品目を列舉すれば左の如くである。(百分比)

	一九三一年 入・〇	一九五〇年
一位 大豆	大豆	一四・四
二位 生絲	桐油	七・〇
三位 蛋品	猪毛	六・七
四位 茶	油腊	五・四
五位 綿絲	落花生	四・七
六位 果實	蛋品	四・七
七位 毛皮	綿羊毛	四・一

海外ノート

八位 原綿	三・七	茶	二・三
九位 桐油	三・五	雜糧	二・三
小計	四五・四		五二・六

表中、生絲、綿絲の輸出が五〇年には消えているのが目につくが、それについては、殊に棉絲については、従前の其の輸出は國民の衣料缺乏を尻目にみての營利本位の飢餓輸出であり、新民主主義經濟の排斥するところである、と指摘されている。

いづれにしても農産品が輸出の大宗を成しているわけであるが、ただ従前はそれが消費財乃至奢侈財の輸入(しかも入超)と連結して國民經濟の停滯的、半植民地的構造の再生産を結果していたのに對して、現在は原料及び生産財の輸入と連結して、國民經濟の構造變化、その高度化に向つての一起動點として作用しつつある點、その持つ意味は著しく違つて來ていると言わねばならぬ。

一國の資本蓄積、生産の擴張は、暫く税及び價格セーレによる原始的蓄積形態を別にすれば、結局は剩餘價值部分の浪費節約、貯蓄に待つばかりではない。新中國の工業生産の殆んど七〇%前後が國營企業と推測されるから、この面の剩餘價值部分は税收その他と合して國家收入となり、そして昨年度中央人民政府財政支出の二三%(穀物表示三九三萬トン。なお中國の穀物生産總額一億トン、農業税約一五〇〇萬トンと考えられる。)が經濟投資、主として工業向け投資に向けられた。

農業面の剩餘價值部分は等價交換を前提する限り、税負擔以外

は農家の手中にあり、その一部分は買付け、輸出されて外貨となり、生産財の輸入に向けられ、工業の擴張に使用される。その擴大した工業生産物に對しては、先に農家に支拂われた輸出代金が購買力となり、國內市場となる。(然らざる場合はインフレとなり農業面からの價值收奪となることは避けられない。)農村は新中国の資本蓄積の主要來源となると同時に、その主要市場となる、というテーゼは對外貿易についても、その基底を貫く根本思想である。

五 中國の對外貿易に占むる國別の比重を見るに、戰前戰後の變遷は左の如くである。(輸出入總額中に占める百分比)

	一九三五年	一九五〇年
一位 アメリカ	二〇・七	二二・四
二位 日 本	一六・二	二二・〇
三位 イギリス	九・八	一四・五
四位 ドイツ	八・九	七・一
五位 香 港	七・七	五・八
六位 佛 印	四・四	四・六
小 計	六七・五	七八・四

日本、ドイツの落伍とソ連、マレイの進出とが顯著である。對ソ貿易の發展はもちろん兩國の友好關係に基くものであり、純商業的と言うよりも政治的性格が強く、昨年二月の中ソ友好同盟條約、同附屬協定(向う五ヶ年三億ドルの對中國クレジット設定を含む)、四月の中ソ通商協定によつて促進されているものである。

兩國貿易の主要品目は「中蘇貿易の一年來の發展」(新華社、一九五一・二・一三)その他によれば左の如くである。

中國への輸入 工場、礦山、鐵道乃至農業用機械器具設備
ソ連への輸出 大豆、茶、生絲、桐油、花生油、豚毛、羊毛
なお右資料の報ずるところではソ連の機械類の價格は米英のそれに比し二〇〜三〇%方安値であり、これは主として軍需インフレの有無に起因するところであると言つてゐる。

對アメリカ貿易は總額において二位、輸入においては一位を占めるが、その輸入品目はもちろん棉花であらう。その著しい部分は香港を経由していると思われる。前掲表において對香港輸出は二六・四%を占めるに拘らず、香港よりの輸入は一・五%にすぎない。然るに香港側の發表によれば (Far Eastern Economic Review 1951. 2. 25) 昨年度中國からの輸入八五八百萬ホンコンドルに對し、中國への輸出は一、四六一百萬ホンコンドルと却つて七〇%も多いのである。この食い違いは、中國側の發表においては、香港からの輸入の大きな部分をアメリカの原輸出として對アメリカ貿易に組み替えているのだと思われる。

最後に、昨年度の中日貿易主要品目は左の如くであつた。(通産省編「通商白書」(單位萬USD))

中國より輸入	三、九五四	中國へ輸出	一、九六四
大 豆	一、三五一	棒 鋼	四三九
強粘結炭	五九二	亞鉛鐵板	四二一

落花生	三三六	銅板	三六八
ラミ	三二五	小計	一、二二八
鐵礦石	二七一		
小計	二、八七五		

(西山武一)

ソ連圈諸國の經濟協力の形態と方法

新らしい經濟關係の成立

ソ連の存在は、資本主義國と社會主義國との間に二つの體制の對立と共存とをそのままに反映する特殊な經濟關係を設定して來たが、ソ連周邊における人民民主主義國家の群生とこれにともなう「ソ連圈」乃至「社會主義陣營」の形成は、外的にはこの二つの體制の對立と共存とによつて制約を蒙りながらも、陣營内の國家相互の間には質的に全く新しい經濟關係を設定するに至つてゐる。M・バローモフはかかる經濟關係を規定して云う。

「ソ連と人民民主主義諸國との經濟協力は、資本の權力から解放された諸民族の間の相互關係の新らしい、より高度の型を表わしている」と。

レーニン、スターリンの民族理論によれば、資本の權力の下における諸民族間の相互關係は、第一に、世界經濟および世界市場の成立によつて生ずる諸民族の經濟的接近、第二に、先進民族による後進民族の帝國主義的抑壓と搾取に對抗して生まれる民族の

獨立・解放の闘争、なる二つの相矛盾する傾向を含んでおり、この矛盾の解決は、帝國主義の鎖をたち切り、相互信頼と自發的合意に基いて單一の世界經濟における諸民族の結合を主張するところの、プロレタリア國際主義を通じてのみ初めて可能だとみられている。

註一 例えば、スターリン『レーニン主義の諸基礎』中の「民族問題」をみよ。

だとすれば、今日「資本の權力から解放された」諸國間に存在する經濟關係は、かかるプロレタリア國際主義の實現であり、諸民族の經濟的接近はかつての抑壓と搾取に代る協力和相互援助の關係によつて裏づけられ、「世界社會主義經濟の物質的精神的前提」(スターリン)をなしていると云うことが出來よう。それはまさに「諸民族間の相互關係の新しいより高度の型」たり得るものであらう。

註二 ソ連内部の各共和國間の關係は、この新らしい諸國間の經濟關係についての示唆を與えるであらう。

第二次大戰後、周知の通り、國際通貨基金、國際復興開發銀行國際貿易機構などが、資本主義、社會主義兩陣營を含む諸國間の經濟關係を通貨、金融および貿易の側面から世界的な規模で調整しようとして試みているが、先の民族理論からも明らかなように、ソ連圈諸國がこれらの機關による資本主義諸國間の經濟關係の矛盾の解決を不可能とみ、またこれらの機關は必然的に特定資本主義國による他の諸國の從屬・支配の道具に轉化せざるを得ないとい